第11回子ども学会議

(日本子ども学会学術集会) 報告

『文化的・社会的存在としての子ども』

大会長 宮下孝広 (白百合女子大学教授)



「第11回子ども学会議(日本子ども学会学術集会)」は、「文化的社会的存在としての子ども」というテーマで、2014年9月27日(土)・28日(日)の両日、東京都調布市の白百合女子大学キャンパスで開催させていただきました。学会設立の会をさせていただいてから10年余、そして新たな10年の幕開けとなる今回は、もう一度創設の趣旨に立ち返り、今後の方向を見定めていきたいという願いに導かれてのものでした。「子どもは、生物学的存在として生まれ、社会的存在として育っていく」とは、小林登名誉理事長から常々お聞きしていた言葉ですが、このような存在である子どもを十全に理解していくためには、文理融合科学として子ども学を創り、多彩な研究分野から領域横断的に子どもについて語るフォーラムとして学会を盛り上げていく必要があるとの創設以来の熱い思いに、再び油を注ぎたいという願いでした。

ご登壇いただいた開一夫先生、佐倉統先生、榊原洋一先生、そしてシンポジウムをコーディネートしていただいた木下真先生、安藤寿康先生はそのような趣旨を共有してともに歩んできた方々であり、改めてお話を伺う機会を得て、学ぶ楽しさを噛みしめることができた幸福なひとときでした。シンポジウムにご参加いただいた笠間浩幸先生、新崎国広先生、そしてアフリカ子ども学研究会の亀井伸孝先生、竹ノ下祐二先生、山田肖子先生、清水貴夫先生にも心から御礼申し上げます。またポスター発表をしていただいた会員の皆様にも感謝申し上げます。最終的に29件の発表があり、内容も多岐にわたっていて、子ども学会の関心領域の幅広さが表れていたと思います。

もう一つ今回の特徴は、齋藤亮一先生の写真展「コドモノクニ」と、西岡直実先生による「子どもたちのクリエイティブ・ワークショップ」を開催させていただいたことです。生活や活動のなかでの子どもたちの生き生きとした姿に目を向けていきたい、そしてそれを育む自然環境や文化的・社会的環境について、教育的・芸術的な働きかけも含めて考えていきたいとの願いが背景にありました。これからの学会活動への模索の一つとなれば幸いです。

最後に、ご出席いただいた会員の方々に御礼申し上げます。熱心に耳を傾けていただき、 討論に積極的に参加していただいたことで、実り多い大会とすることができました。